御注文は？　～天使で！～

雨月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
御注文は？　～天使で！～

【Ｎコード】
Ｎ９９７７Ｄ

【作者名】
雨月

【あらすじ】
神が去った土地に新たな神がやってくる……スケベな野良天使のシグマは喫茶店で友人と話しているのだが彼の運命やいかに！

プロローグ／野良狩り！（前書き）

零時「え～前書き担当として選ばれた剣山零時です……みんなぁ、俺のこと知ってる？知ってる人はメッセージ下さいぃ！！こほん、後ほど、補佐がつくとおもいますが……そこは人気のある人物が出るでしょう。さて、資料によると今回の主人公は俺じゃなくて天使のシグマのようですね？伝えるより読んだほうが早いとおもいますので、どうぞ！」

プロローグ／野良狩り！

プロローグ

「まったく、引越しだなんて……面倒だわ」

一人のお嬢様が呟く。

「これだから神なんてやってられないわよ」

ぼやきながらもその手にはティーカップが握られている……が、

「ま、野良狩りからはじめましょうかね～……ふふふ、どんな奴がいるかしら？こっちじゃあんまり能力高い奴いなかったからね～」

とても楽しみだといわんばかりに笑ったのだった。

――――

「なぁ、シグマ……」

「なんだ？」

「こっちに新しい神様が来るそうだ。お前、つかまらないように気をつけろよ？」

「おいおい、俺が捕まるわけねぇだろ……あ、すみませ～ん」

「はい？御注文はお決まりでしょうか？」

「はい」

「御注文は？」

一人の野良天使が注文を始める……

一、

「敵襲！敵襲！」

ぶぉぉぉぉぉ～

ほら貝が鳴り響き、監視兵が叫ぶ……

「神軍が来たぞ！応戦開始！」

「大佐！兵が逃げ出しています！さすがに圧倒的戦力ですので……

…」
報告した兵士を大佐は殴りつける。
「ばか者！それを何故早く言わないか！我々も早く逃げるのだ！」
「了解！」
「シグマ、お前もそんな木の上にいるとつかまるぞ！」
その二人も撤退を始める。
「……まったく、あわただしいもんだね～」
前に野良天使狩り……まぁ、天界じゃ一般的には野良狩りといわれているのだが、天の使い……つまり天使が使えているのは天、ここじゃ神だ。
「両方とも楽しんでやがるぜ」
木の上から俺はその光景を楽しむ。
もっとも、野良狩りと言ってもつかまって拷問受けるとかそういうのではなく、神が新たな土地に引っ越すとその馬鹿でかい屋敷のお世話となる。しかし、その場所の神に仕えていない野良天使どもが全員捕まるのではなく、募集人数とかが決まっているそうで……その規定値に達すると終了。つかまった奴はその時点で契約書を書かされてあえなく神様の使い……パシリになるというわけである。
自由をこよなく愛する俺としてはつかまりたくもない。このあたりを収めていた前の神様は相当いい神で、少数精鋭を図っていた。そのまま少数精鋭の殆どを引き連れて別の土地に引っ越していってしまったのである。
「さて、後募集定員は……一人ってところか？
連れて行かれる野良天使を尻目に俺は残りのカウンターを確認する。
いわば、鬼ごっこのようなもので、逃げれる範囲が決まっている場所で神の軍と野良天使たちが戦ってもいいし、逃げてもいい……とりあえず、募集定員いっぱいになったら野良狩りは終了。先ほど撤退してった連中は敵のメイドに恐れをなしたのだろうな。ああ、ちなみに前の人たちの部隊は神様とその世話係とおもわれる爺さん

二人だけだった。
ま、今となってはどうでもいいことだな。
「ん？」
木の上で寝転がっていた俺の視界に一人のメイドが倒れているのを見つける。
「あいたた……」
どうやら負傷しているようで、右手を押さえている。
「……」
まぁ、俺も天使だし、困っている者を助けるのがお仕事だ……別にその天使がぼいんで、可愛いから助けているのではないと先に言っておこう。
「大丈夫ですか？」
「え？あ、ちょっとこけて右手を怪我してしまったんです」
「それは大変だ……医務室はあっちですよね？はやくいきましょう！」
「え？あ、あの～」
俺は相手の返事を待たずに相手を担ぐとそのまま医務室へとそのメイドさんを連れて行ったのだった。
――――
「ふぅ、どうやら終わったようだな」
メイド側の医務室で時間稼ぎをしているとどうやら終わったようだ。俺がこの医務室に入った時点で終了を告げる花火が打ちあがった。
「あの～あなた、名前は？」
医者とおもわれるメイドに手当てを受けているメイド……ええい、ややこしいな、メイドＡとしよう……に、名前をたずねられる。
「俺ですか？俺の名前はシグマです……あなたは？」
「私ですか？私の名前はプロトです、プロト・メースン……」
ちなみに、二つ名をもらえるのは神に従うものだけである。

「はぁ、成る程……いやぁ、あなたのおかげで今回の野良狩り、生き残ることが出来ましたよ……じゃ、俺はそろそろ帰りますんで……」
俺は医務室の扉を開ける。
「あの～シグマさん、お礼を……」
「いえ、いいです……困っている者を助けるのが天使ですから」
ま、なんだ、担いでくる途中やわらかいあれが背中に当たっていたり、色々と堪能できたから個人的にはギブ&テイク？の精神だったからな。
「じゃ、さいなら～」
扉を開けた先に待っていたのは……
「おっと、お前が最後の捕獲者だな？」
「へ？」
きりりと眉を上げた恐そうなメイドさんだった。廊下にはびっちりとメイドたちが俺を包囲している。
「ど、どういうことだ？野良狩りはもう終わっているのだろう？」
な、このメイドさんは何を言っているんだ！？
「メイドがこの屋敷に連れ込んできた野良天使は神の使いとなる……それがルールだろう？」
「ちょっと待て！俺はメイドに連れ込まれたんじゃないぞ！負傷したプロトさんを医務室まで運んできたんだ！」
俺は無実の置換容疑で逮捕されてしまった人物の心境に立たされていた。
「そんな言い訳が通されるわけないだろう？私としてはお前と戦いたかったのだが……」
そんな戦うとかそういうことはどうでもいい。
「俺はやってない……じゃなかった、俺は逃げきったんだ！！畜生！こうなったら……」
医務室の窓を開けて俺は脱走を図ろうとして……
「対天使用トラップだと！？」

気がつけば網の中に自分が捕まっていた。
「……往生際の悪い野良だ……いや、もう天使か？これから忙しくなるだろうから気合を入れていけよ？こいつを地下に連行しろ！」
いや、連行ってあんた……
「「了解！！」」
「危険度Sランクだ！慎重に運んでいけ！！」
まるで爆発物みたいな扱いを受けながら、俺はげんなりとした表情で地下の牢屋へと連行されていったのだった。

シグマ、心の叫び声（前書き）

零時「あ～ちょっとあれな物語ですが、これもまたありなのかな～と思っています。これ、ぜってぇ感想とかきそうじゃねぇな……さて、第二話です。執事となってしまったシグマですが、まだまだ序章に過ぎません！彼の苦労は山よりも深く、彼の妄想はその苦労よりも大きいのです！……と、言っておけばいいんだよな？」

シグマ、心の叫び声

二、

「笑えよ、俺を誰だとおもってるんだ？とかプロローグでほざいていた俺を笑えよ」

「……まぁ、そんなに肩を落とすなよ？俺だって捕まったんだからさ」

俺は今、執事の服に着替えている。その隣にいるのは友人アルトだ。

「アルト、お前は何で捕まったんだ？」

「……べらぼうに強いメイドに早速目をつけられてあっという間にしとめられた……」

アルト、弱いからな……

「ところで、シグマは何で捕まったんだ？」

「……俺か？俺は負傷したメイドさんを医務室まで連れて行ったら見事に捕まった」

「成る程～お前、そのメイドさんって胸が大きかったんだろ？」

「ま、それはさておき……」

アルトを捕まえたであろう、眼光鋭いメイドがこちらを見ている……俺と戦いたいとかそんなことを言っていた戦闘狂のメイドさんである。

「そろそろ行かないとお叱り受けるぞ、絶対」

俺たち二人はさっさとメイドさんの前を横切って目的地へと向かったのだった。

――――――

「え～名前はシグマ。好みの女性は大人の女性で、好きな下着の色は黒色……言われてみたい言葉は『お姉さんが教えてあ・げ・る（はぁと）』です。ああ、あなたのようなちっちゃい人には使われたくもないし……いえ、年下には遣われたくないし、甘い言葉

とかささやかれてもハートがうち抜かれたりしませんし、ぺたんこが好きなロリコン野郎の気持ちなんてさっぱりです……や～い、ぺたんこ……こほん、すいません、少々心の扉を開け放ちすぎました……というわけで、俺を野良に戻してください」

俺の目の前に座っているのはこの土地にやってきたらしい神だ。どんな人物かとおもったら単なる子どもだった。そして、彼女は間違いなく怒っている。だって、俺が怒らせたからな～……こういったところに反応するから俺から子どもって言われるんだ。

「ジャス、こいつを今すぐに仕留めなさい！」

「主、それはどうかと……」

俺とアルトを捕獲した恐そうなメイドさんの名前はジャスだそうだ。ジャスさんのほうは怒り狂っている神をなだめているが……ここで神が俺のことを邪魔者と扱ってくれれば俺はお役ごめんでここからぐっばいなのだ。し～ゆ～あげいん！ではなく、二度とあうことはない……というわけで、さらに一押ししておくとしよう。

「ペタンコ♪」

「ムカっ……」

めっちゃわかりやすい性格だな～この神様♪

「主……抑えて……シグマといったな？ちょっとこっちへこい」

俺はジャスさんに別室へと連れて行かれたのだった。

「ここは神とは無縁の場所だからな……何をしゃべっても大丈夫だ……何故、あのような態度をとる？」

「俺、残念ながら誰かに仕えるとか、そういうの嫌いなんです」

俺がそういうと相手はにやりと笑う。

「以前、ここの神が精鋭をはかっていたときにシグマ……お前はその頂点にいたはずだと私はおもっていたが？」

「……やっぱ、知ってましたか……」

俺は以前、この土地にやってきた神様と戦ったのだが……物凄く、相手が悪かった。ま、その後俺は見事に執事となってその神様に仕えたのだった。

「何故、あの神についていかなかった？」
「……そんなの、俺の勝手ですよ」
俺がそういうと相手はそうだなと呟いて……俺に頭を下げてきた。
「頼む！この通りだ！彼女の執事になってやってくれ！」
「ちょっと、頭を上げてくださいよ……」
「いいや！お前が頷くまで私は頭を上げない！」
俺はその光景を見ていられなかった。
「わかりました！わかりましたよ！仕えます！どんなことでもしますから頭を上げてください！」
これはもう、観念するしかないだろう……俺は両手で相手の肩を掴んで無理やり立たせる。
「すまんな……私のわがままで……」
「いえ、気にしないで下さい……あの、その事実を知っているのはジャスさんだけですか？」
「まぁ、そうだ」
俺はもうしょうがないので相手に伝えることにした。
「……絶対にそのことは他言無用でお願いします。それと、俺の階級は新人扱いでよろしくお願いします」
俺がそういうと相手はきょとんとしている。
「なぜだ？執事とはいえ、お前の待遇は最高のものになるはずだぞ？」
「ま、そこは色々と込み入った事情がありますんで……約束、お願いします」
俺は相手に頭を下げた。
「……わかった、お前が望むのならそうしよう……だが、本当にいいのか？」
「ええ、構いません」
――――――
「主、シグマの説得に成功しました」

「ふん！そんな失礼な奴なんて要らないわよ！」
俺が仕えることとなった相手は相当ご立腹のようだった。
「かりかりする人は胸が……いえいえ、なんでもありません。独り言ですので気にしないで下さい……先ほどは住みませんでした、ご主人様」
俺は頭をたれて主の許しを請う。
「……どういったトリックを使ったのかしら？ジャス？」
「いえ、私は何もしていません……彼、シグマが承諾してくれたのです」
「その胸でつったんじゃないでしょうね？」
ああ、今気がついたらジャスさんも相当……こほん……
「神様、残念ながら俺、今気がつきました……知っていたら今頃握り締めていますよ♪」
「この変態！」
俺の顔面に花瓶が飛んでくるが……我慢だ。
「……大丈夫です、神様のを握り締めようなんておもいません。だって、握り締めるほどなさそうですし……んがっす！！」
花瓶、二つ目……右目に直撃したのだが、このくらいは大丈夫だ。
「最低ね！ジャス！こいつは新人の宿舎にさっさと放り込みなさい！」
「はい、わかりました」
「やれやれ、これだからひんにゅ……ジャスさん、早く宿舎に連れて行ってください、ご主人様のために働きたくて股間が……こほん、体がうずうずしています♪」
俺はそういってジャスさんと共に怒り狂っている神を置いて出たのだった。
「……お前のあの物言いは正直だったのだな？」
「ええ、まぁ……素直といってください」
残念ながら俺がこういう性格になったのは俺のせいではなく前の

神様のせいだということにしておこう。これは天に誓って間違いないと伝えておく。
「……ところで、これからの生活のことなのだが……新人研修として私の元で働いてもらいたいとおもう」
「よかった、あの神様じゃなくて……きっと、毎日毎日花瓶を顔面に投げつけられるんだろうなぁ～……あれは絶対他人をいたぶって喜ぶタイプですよね？」
俺がジャスさんに冗談まじりに伝えると相手はくら～い笑いを宿していた。
「くくく、そういっていられるのも今のうちだぞ？明日からは私がお前をしごいてやるからな……覚悟しておけ、新人として扱うからな？」
「……やれやれ、この屋敷にはSが多そうだ」
俺はそんなことを呟いて天を仰ぐのだった……ああ、ここって天界だから仰げるものがもうねぇ～な～
「シグマ、これからなれていくがいいさ」
ジャスさんにそういわれたのだが、俺はそっちの気はない。

彼は執事になったらしい（前書き）

零時「さて、今回補佐が決定しました……シグマです…ぱちぱち」シグマ「まぁ、当然でしょう」零時「思う存分……てか、危ないよな、この小説？大丈夫なのか？」シグマ「大丈夫っすよ、別にまだ誰も襲ってるわけじゃないんだし……」零時「ま、そうだな」

彼は執事になったらしい

三、

「なぁ、アルト……」

「なんだ？」

「メイドさんをメイド喫茶だけじゃなくてこう、目の前に……いや、身近に感じる機会なんて殆どないだろうな？」

「そうだろうけど……俺らだってすごい格好だよ？執事だから」

俺はため息をついた。

「じゃ、俺……これから宿舎の掃除だから……じゃあな」

「うん、ばいばい」

俺は本日ジャスさんに連れて行かれた宿舎へと向かったのだった。

――――

「あ、シグマさん！」

「あれ？プロトさんっすか？」

そこにいたのはあのすばらしい、メイドさんだった……こっちに走ってきているのでゆれてるあれがいい眺めだな～

「結局、執事になっちゃんたんですね？しかも、あの神様を冒涜したとか？」

「いえいえ、事実を言っただけです」

俺は本当に事実を言っただけだ。

「ところで、ここでなにをしてるんすか？」

俺は不思議におもってプロトさんに尋ねる。

「ああ、私新人ですからここが宿舎なんです」

「え！じゃ、俺と同じ宿舎なんですか！いやぁ、良かったな～」

基本的に宿舎はだだっぴろい部屋一つが新人で残りのCランク、Bランク、Aランク、Sランクの天使たちにはそれぞれ部屋が用意される。

あはは～……プロトさんと同じ部屋か～……これは意外に

良かったかも……
「じゃ、一緒に寝ましょう！」
俺はプロトさんの両手を掴んでぐっと迫る。
「あ～……私は構いませんけど」
よっしゃ！世界は俺を中心にまわっているんだ！
「その、何故か知らないけど……ジャス様が駄目だって……」
「にゃ、にゃに～」
世界は俺を回ってるんじゃない！あのSを中心にしてまわっているんだ！
「そういうことだ、シグマ」
「じゃ、ジャスさん！」
「新人の執事はお前以外にいないからな……お前の宿舎は今日から私の部屋だ」
「え～……」
いや、考えようによっては……まぁ、プロトさんはあきらめるしかないな。
「……ああ、そういえば一つ聞いておきたかったんですけど……」
俺はジャスさんに尋ねることにした。
「ジャスさんってSランクですよね？」
「いや、違うぞ」
おかしいな、この人だったらSだとおもったんだけどな～……

――――

夕食も済み、新人研修も済んで後は寝るだけ……
「さ、寝ましょうジャスさん♪俺、疲れちゃいました♪」
「そうだな、寝るか」
俺はベッドに入って……
「にょわぁぁぁぁぁ！？ご、ご主人様だとぉ！？なんのサプライズだ！」
「何よ？」

先にベッドに入って眠っていたのは神様……リウェル様だった。
俺は冷静さを失わないように一つ咳払いをして相手に尋ねる。
「り、リウェルさ、さま～？何故、ジャスさんのベッドに入っているんですか？」
「寝るときはジャスに護衛してもらってるのよ」
「ふ、ふ～ん……そうなんですか～……ジャスさん、リウェル様、俺、そろそろ宿舎に、戻りますね？じゃ、さいなら～」
俺は新人宿舎に……詳しく言うのならプロトさんの隣に向かって廊下を駆け出したのだった……はずだったのだが、
「まて、シグマ」
「く、ジャスさん、俺をはめましたね？」
「勘違いしたのはお前のほうだ」
「……まぁ、そうですけど……」
とりあえず、疲れているのは事実なので俺は静かにベッドの中に入った。
「……ご主人様、寝ている俺を見て襲ってこないでくださいね？」
「それはこっちの台詞よ！」
「そういうことは自分の体型をみて言ってください♪」
「こら、シグマ、口が過ぎるぞ」
さて、そろそろマジ切れして騒ぎ出すだろうから俺はさっさとベッドの中に転がり込むと目を瞑った。
「じゃ、おやすみなさい、ご主人様とジャスさん……すやすや」
俺は夢の世界へと妄想の翼をはためかせて向かったのだった。
ま、明日の朝になっちまえば夢というものは終わってしまうものなのだが、ひと時のティータイムとかそういうものだと踏ん切りをつけることとしよう。
――――
「きゃあああああああああ！！！」
ジャスさんの部屋から突如として金切り声が朝の静けさを一方的に引き裂いた。

「どうした！敵襲か！？」
ジャスさんはすばやくベッドから出たのだが……声を上げたのだが俺だとわかったのか舌打ちをする。
「なんだ、シグマか……どうした？」
「あわわ……俺としたことが……」
しかし、俺はそんなことを気にしてはいなかった。
「一体どうした？物凄い叫び声だったぞ？」
「……俺、俺……ご主人様を抱きしめて眠ってました……うう、一生の不覚……銃、ありますか？一発こめて俺のこめかみへ……」
「おーい、しっかりしろ！」
がくがくと揺さぶられながら俺の意識はいずこへ向かうのであろうか？はは、こんな俺を笑えよ、鼻で笑えよ……自己紹介じゃ年上の女性が大好きみたいなこと言ってくせして……きっと、寝てるうちにあんなことやこんなことを無意識にしてしまったに違いない。四面体よりも凹凸がないご主人様のあれに頬をすりすりなんかしちまって……
「ジャスさん、縄、貸してください……ああ、この屋敷の近くに天使一人がぶら下がっても折れることのない木とかありますか？」
「おい！しっかりしろ！」

ばちんっ！！

「はっ！俺は一体何を！？」
世界が変わったような気がして俺はようやく目を覚ましたのだった。
「あ、おはようございます、ジャスさん……相変わらず、大人な体つきをしてますね？」
「やっとまともになったか……手間のかかる奴だ」
ジャスさんに叩かれてどうやら俺の思考回路は通常モードへと変

わったようだ。良かった、おかしくなったのかとおもったぜ……
「ジャスさん、このことは口外禁止でお願いします。こんなことがご主人様に知れ渡ったら俺、名折れ者です。うそつきです、手を出さないといいながら……お恥ずかしい」
「……お前はそこを恥ずかしいとおもうのか？」
「ええ、まぁ」
俺は堂々と頷き、朝の日光を体に受けたのだった。
「さて、今日もがんばりますかね～」
ジャスさんよりも早く俺は部屋を出たのだった。

人間界　人間界でのお仕事（前書き）

零時「ああ、この物語って一応、人間出るんだな？」シグマ「ええ、色々と出ますよ？俺、人間界で普段は生活しているようなもんですから」零時「ふ～ん？どうでもいいけど……ああ、感想、評価、メッセージよろしくお願いします」

人間界　人間界でのお仕事

四、

俺の名前はシグマだが……人間界へと向かうことが良くあるときの俺の名前は天道時シグマとなる。

「シグマ委員長、生徒会の人たちが呼んでましたよ？」

「教えてくれてありがとう」

「い、いえ！」

「う、うらやましいぞ！このこの！」

こちらでの俺は成績優秀、人望厚いクラス委員長なのである。すぉぉぉしてなんとぉぉぉ！女子にモテモテなのである！ここが一番重要だ。

ふはははは……天界で働くよりもこっちにいたほうが俺って意外といい一生を送れるかもしれないな……

こほん、俺が人間界にいる理由……それは、天界から落ちてきた天使が悪さをしないように見張ったり、取り締まったりするのが俺のお仕事なのである。俺が見張る範囲は高校生辺りなので今は高校二年生として生活しているのだが、六ヶ月に一回……つまり、半年に一回のペースでしか悪さをしようとたくらむ天使はいないのであとは普通に高校生活を送っているのである。

学校の廊下を走ることなく余裕で歩くさまは周りからどう見えているのだろうか？女子たちの熱い羨望のまなざしが俺へと向けられている……ああ、人生の勝ち組だぜ♪

たったったったった……どごん！

「ぐおっす……」

「あいたたた……」

廊下の角から誰かが飛び出してきたようで……俺はしりもち

をつきそうになったのだが、そこは何とか踏みとどまる。ま、ぼさっとしていなかったら見事に避けていたのだが……

「君、大丈夫か？」

「あいたた……」

未だにしりもちをついてミントグリーンのパンツを俺に見せてくれている相手は見知らぬ女子生徒だった。

ううむ、この高校の全女子生徒の顔は俺の脳内にインプットしたとおもったのだが……蛇足だが、名前に住所、スリーサイズに趣味と苦手分野に成績関係とか色々と情報まで覚えてます。ああ、悪用したことなんて一度もないからそこのところは大丈夫……さて、どうやらまだ……いや、この子……天使か？とりあえず、人間じゃないな。

「すみません、急いでまして……」

「たてる？……って怪我してるね？保健室に連れて行くよ」

俺はそのこの手をとるとそのまま保健室へと向かって歩き出した。

「え、え～と、大丈夫なんですけど……」

「……わからないぞ、怪我口からばい菌なんかが入ったら大変だからな」

保健室の扉を開けて保健のお姉さんに女の子を突き出す。

「すいません、先生……ちょっと女子生徒に怪我させてしまいました」

「へぇ、あのシグマかが？」

くるりと振り返ったそこにいたのはどう考えても俺より若そうなおねえちゃんが椅子に座っている。タイトスカートから伸びる二本の足は短かった。

「ええ、廊下の角でぶつかってしまって……」

「そうか、まずはあれだ、レントゲンと精密検査だな」

そこまで重症だろうか？俺の疑問に答えることなく保健室の先生は遠慮している女子生徒を押さえつけてレントゲン室へと連れて行く。

「い、いいですって！」
「なぁに、遠慮するなよ……シグマ、お前生徒会室からお呼びがかかってるんじゃなかったか？」
「まぁ、そうですけど……そちらの女子生徒の方に迷惑をかけてしまったので彼女の治療が終わるまで待たせてもらいます」
「そうか、それなら外の待合室で待ってな」
俺は暴れている女子生徒を尻目に待ち受け室に向かったのだった。
「……手術中か」
保健室から出るとすぐに扉の上に備え付けられていた白文字で手術中と書かれているランプが点灯。たった右ひざを少しすりむいただけの女子生徒は哀れ、レントゲンからCTスキャンで体の断面までくまなく調べられるのであろう……ここじゃいえないが、さらにすごい道具にもかけられているに違いない。
「……俺、今度生まれ変わるならCTスキャンに生まれ変わりたいな」
そうしたらほら、おおっぴらにはいえないが色々と見えるだろうからさ……ああ、男子は遠慮したいな。
――――――
「あ～検査の結果だが、彼女は人間じゃないな」
「やっぱし……」
放課後、先ほどの女の子が涙目になりながらも帰っていった後に俺は保健の先生と話していた。
「で、リストに載っている天使か何かですか？」
「いいや、載ってない……それに、天使じゃないぞ、あれ」
俺はそういわれても頭にはてなを浮かべるしかなかったのだった。
「え～と、それってどういう意味ですか？」
「いるだろう、まだ」
「ああ、成る程……悪魔ですか、あの子？」
俺がそう聞くと先生は頷き、さらにその悪魔が人間界にいるという悪魔のリストにものっていなかったそうだ。

「でも、天使が天使を罰して悪魔が悪魔を罰するんですから俺がああの子を捕らえたりしなくてもいいんですよね？」
「ま、ルール上はな」
　天使は人間界に勝手に降りてのさばる天使を罰し、悪魔は人間界に勝手に降りた悪魔を罰する。
後者の場合はちょっとわけありで、人間界に来た悪魔が悪さをし続けるとちょっとしたサプライズが魔界に起こってしまうのである……簡単に言うなら魔界滅亡。
存在というものが消えてしまうもので、某パズルゲームのように左右のお邪魔的存在……この場合、悪魔……も一緒に消えてしまうのだから、魔王も人間界で悪さをしている悪魔を罰しないといけないのである。なんか、この世界を造った人はよく考えてるな～と、俺はおもってしまったね。ああ、この情報を知っているのは極少数の悪魔や天使だけで、残りの連中はやりたい放題やっているのである。
　で、いつもとばっちりを受けるのは俺とか、その関係者の人たちだ。後処理が終わるまで俺は天界まで戻ることは出来ないので出張だと思ってくれればいい。けど、高校二年生で出張ってどうよ？
「じゃ、新しいご主人様のところには連絡しておくぞ？」
「ええ、お願いします」
　今度の悪魔がどのくらいの実力者かわからないのでここはストーカー……もとい、彼女の調査をしなくてはいけない。軽く見て一ヶ月か？今まで相手にしてきた連中は半年近く行動を開始しないような慎重派だったからな、そんな奴らだったらまた面倒なことに巻き込まれそうなんだよな～
「おっと、そろそろ学生さんは考査試験じゃないのか？」
「あ、そうだった……けど、俺の学力なら大丈夫ですよ」
　長年高校生をやってきているので、初めのほうこそ十点台連発だったのだが今では九十点、いや、百点連発である。
「じゃ、先生……これから先ほどの女子生徒をストーキングし

てきます」
「……もうちょっと別の言い方がないのかね……」
「ま、事実なんで……給料の申請とかよろしくお願いします」
「ああ、今回も法外な値段を申請しておくからな？へまとかするなよ？ビルとかぶっこわすなよ？」
「ええ、わかってます」
俺は背中から天使の象徴と言ってもいい白い羽を伸ばしてそのまま窓から飛び立ったのだった。

人間界　ターゲットの捕捉（前書き）

シグマ「え～零時先輩は出番が近いとのことでしたので主役降板……メインが決まるまで補佐の俺が前書き担当となりました……さて、前回から人間界にやってきている俺なので、天界のほうには殆どいません。とりあえず、人間界が終わってから天界に行こうかな～なんておもってます！それでは！評価感想、よろしくおねがいしまっす！」

人間界　ターゲットの捕捉

五、

「こちら天使さん一号、ターゲットはただいま帰宅……どうぞ」

『こちら保健室の天使、ターゲットの名前は浅川シノン今日付けで天使さん一号と同じ教室に転校してくる悪魔です、どうぞ』

トランシーバーを介しながらの会話で、前者が俺、後者が先生だ。

「両親などの存在はなさそう……おっと、コンディションレッド、危うく発見されそうになりました、どうぞ」

『そろそろ戻ってきてください、どうぞ』

「これから着替えのようですが、どうぞ」

これからがいいところなのに……

『カムバック、どうぞ』

「……了解」

俺はトランシーバーの電源を切るとさっさとその場を離れたのだった。俺は残念ながらそこまでお馬鹿ではないのでちょっとしたことでミスをするのが大嫌いなのだ。つまり、上司からすぐに戻るようにといわれたら戻るほうである。

――――

「で、時間かかりそう？」

俺は牛乳を飲みながら首をすくめる。

「さぁ、それはちょっとわかりませんね……素人なら楽なんですが……」

「ま、シグマの目の前に現れるのは相当玄人な連中しかいないからね～へんな期待はしないようにしましょうか」

既に外は真っ暗だ。悪魔が相当強くなる時間帯なのだが、相手が動く時間としてはちょっと遅すぎるとおもわれる。

「申請、通りました？」

「ええ、通ったわよ」

一応、悪さをする天使とか、悪魔とかを捕獲、もしくは迎撃した場合には神とか魔王とかから報酬を得ることが出来る。めちゃくちゃありえないぐらいの値段を吹っかけてもいいのだが、その分、戦闘なんかで人間界に迷惑がかかった場合は一、二回のミスで給料の八割が飛んでいく。失敗の例を挙げるならば人間に怪我を負わせる、人間に見られる、建物を壊す……といったところだろうか？

俺のことを補佐してくれているこの保健室の先生はギャンブラーなところがあるので、物凄い値段をふっかけまくっている。俺が一回でも失敗すればほぼ、給料はゼロとなってしまう……

「で、シグマから見てあの子は何か悪さをする感じに見えた？」

「いえ、そう見えませんでしたけど……」

俺が知っている悪魔の知り合いにあんな顔の連中はいない。すべて世紀末に出てきそうなごつい顔をした不良ばかりだ。

「ま、あんたが骨抜きにされないことを祈るわ」

「骨抜き？残念ながらあの子は俺の好みじゃないんで……その点は大丈夫だとおもいます」

「おっと、ターゲットが動き出したみたいよ？」

保健室の先生……コードネームは保健室の天使……がそう呟く。

「……珍しいっすね？玄人なら家の中で静かにしてそうなんっすけど……」

俺は牛乳がまだ残っているカップを机の上に置く。

「ま、あちらの事情なんて色々とあるわ。さて、今回の仕事は確実に相手を捕獲！」

「捕獲？」

迎撃じゃなくて？手加減しないといけないところもあるし、あとくされがなくて迎撃のほうが楽なんだが……

「ええ、奇怪な行動をしているみたいだし、あんたの同級生を早々生まれ変わらせるってのもどうかとおもうからね」

「情に流されてやられるっていうのはよくある話ですよ？」

俺の知り合いがそれで何人か生まれ変わっちまった……生まれ変わった連中、全員金持ちの子どもとして生まれ変わりやがってぽっちゃりけいになっていたのを見るとああ、生まれながらの勝ち組ってこういう連中なんだな～とおもってしまった。
「ま、その点はあんたの腕を信じてるわ……一応、神様にこのこと伝えておこうか？」
そういって黒電話を手にしている。あの電話の構造を知りたいのだが何故か天界につながるという違えない事実を所持している。
「いえ、あんなちみっちゃい神様に言ったところでそれがどうしたってところでしょうからね……ああ、その神様の補佐をしているジャスさんに伝えて置いてください……ま、徒労に終わるかもしれませんけどね」
俺はそういって保健室を後にしたのだった。
――――――
「お～ほっほっほ！！」
「あ、あはははは……はぁっ」
ターゲットとされていた女の子の家の近くの空き地に二人の女性がいた。片方は高らかに笑っているのだが、もう片方は困ったようにしか笑っていない。
「……」
俺は固まってその光景を下からしか見ていなかった。なぜなら、相手はまぁ、簡単に言うならゴーレムのようなものの肩に乗っていたからだ。
「ピンクか……まぁ、女子高生らしいな」
「あっ……」
恥ずかしげに笑っていたほうがあわててスカートを押さえる。
「まったく！みられるってのはわかってるんだからきちんとその対処をしておくものよ！」
高らかに笑っていたほうが片方を叱責。
「す、すみませ～ん」

「こほん、え～と、あんた天使よね？」
比較的胸が大きそうなお嬢様気質の悪魔が俺に尋ねてくる。答えてやる義理はないが、なんだ、答えてやるのが人の道だ。
「俺か？俺はシグマだ……」
俺がそういうとたしか、シノンのほうがあわてているのが目に見えた。
「し、シグマって言ったら……極悪天使じゃないですか！せ、先輩～なんでこんなところに降りちゃったんですか～」
「ええい！うっとおしい！大体、ここに来たのはあんたが装置を押し間違えたからでしょう！」
そんな三流漫才をしている二人組みに俺はため息を吐くしかなった。よかった、今回はあたりを引いたようだ。ああ、当たりって言うのは楽な仕事な。
「……で、あんたらは何なんだ？」
俺がそう尋ねるとシノンじゃないほうが胸をそらして俺を見下ろしてくる。
「よくぞ聞いてくれたわ！あたしたちは貴族盗賊団よ！あたしが団長のレーミ！」
レーミと自称した団長さんはポーズを決める。
「え、え～と、私が……」
「シノンだろ？」
「え？なんで知ってるの？」
決めポーズをとる途中でやめてしまっているのでなんだかおかしいポーズになっている。えーと、具体的に言うなら胸を強調するようなポーズだな。ま、それなりに胸があるからさまにはなっているが……
「その貴族盗賊団？だったか？お前らに一つ言いたい」
「何？特別に聞いてあげるわ」
「貴族ならいちいち盗賊団を結成すんな……じゃ、俺の言いたいことはいったからばいばい」

俺は銃を取り出して相手の黒い羽根に狙いをつける。
「ひ、ひえ～撃たれる！」
「あ、安心しなさい！天界と魔界の住人には飛び道具は通用しないわ」
それは事実だ……というのも、俺もそれをよく知っているわけではないのだが聞いた話では別世界の力が働いているらしい。簡単に言うならブラックホール？見たいなものが天使と悪魔の周りに渦巻いているそうで、それが飛び道具を消してくれているらしい。だから、天使と悪魔は基本は剣での戦いをしているそうだ。ま、俺は違うが……。

人間界　ターゲットの捕獲（前書き）

晶「どうも、後任としてきまった晶です」ネコ「サブのネコです」晶「いやぁ、またこんな形で出れるとはおもわなかったな～」ネコ「ああ、ほぼ日替わりだな……」晶「じゃ、今日は顔見せということで今後よろしくお願いします」ネコ「評価、感想、その他……」晶「その他！？何それ？」ネコ「……よろしくお願いします」

人間界　ターゲットの捕獲

六、

「安全かどうか……試してみるか？」

「じょ……」

ぱぁぁぁぁん！！

「せ、先輩っ！！」

悪魔の黒い羽根が飛び散り、レーミと名乗った盗賊団団長さんは驚いた顔をする。

「……嘘」

「いや、本当……じゃ、シノンのほうの翼もいただきますかね……」

俺はトリガーを無慈悲に打ち抜き……まったく、こういった表情は見たくないね、別に怪我とかさせているわけじゃないんだが……地に堕ちる姿って奴か？プライドが高い奴ががっくり来ている姿とかあんまり見たくない。まぁ、俺が何もしなければいいって話なんだがな……

両方の翼を俺は消し飛ばし、今度は確実に相手の額へと向ける。

「……投降するなら撃つのやめるぜ？」

「と、飛び道具なんて卑怯よ！きちんと剣を使いなさい！」

レーミのほうはそんなことを口走っており、シノンのほうはゴーレムの肩に死んだような目をして座っている。

「……わかった、別に構わないけど……それが済んだら投降するか？」

「しないわ！絶対にこの私があなたを倒して見せますもの！」

彼女は剣を生成し、俺へとその切っ先を向ける。俺も拳銃を懐にしまうと剣を生成……

「じゃ、ちゃちゃっとやっちゃいますかね～」
「く、いきなさい！ゴーレム！」
誰が作ったかわからんがとりあえず今までその存在を忘れ去られていたようなゴーレムが動き出すが……
ぬごごごごご……

めちゃくちゃ緩慢な動きで、こいつ相手なら別に銃を使っても構わないだろうから俺は銃を取り出して右腕、左腕を打ち抜いていく。
「嘘！？」
「本当……」
右足を打ち抜くとゴーレムの右肩に乗っていたシノンが落ちてくる。
「きゃ、きゃあああああ！！！」
「ちっ」
俺はあわてて落ちてくる彼女をキャッチ……危なく怪我をさせるところだった。怪我させたら先生がおっかねぇ顔になって襲ってくるからなぁ……
「っと、怪我はないか？」
「え、う、うん」
シノンを立たせて俺は剣を相手に構える……レーミは倒れて動かなくなったゴーレムに何とか乗れていたようだった。
「わざわざ獲物を助けるなんて変わった趣味ね？自らの手でいたぶるのが趣味なの？」
「俺はあんたみたいな人のほうが好きだが……今のは成り行き上だ。というか、銃で羽を打ち抜いてたのを忘れてた」
俺はそういって走り出す。ＲＰＧに出てきそうな一般的な剣を相手へと叩きつけるのではなく、投げつける！
「く、それは剣術じゃないでしょう！」
「もっともだ……と、言いたいところだが俺は剣を手にすればそ

れで剣術だとおもってるんだ」
剣を避けたレーミに抱きつくようにして捕縛。俺は相手が持っていた剣を吹っ飛ばす。吹っ飛んでいった剣はシノンが寄りかかっている壁の……シノンのすぐ右側にささる。
「ひっ！」
「おっと、今度近隣の人の家の壁を塗りなおさないとな……っとに往生際の悪い人だ！」
俺は相手を押さえつけてすばやく首元に保健室の先生から渡された麻酔薬を打ち込む。
「ぐぅ……な、何を打ち込んだのよ！」
意識ははっきりとしている状態で、体が動かなくなるという特殊な麻酔を打ち込んでやった。
「これでよし……楽しみたいところだが……シノン、お前もまだ暴れたりないか？」
「……」
彼女は無造作に手をあげる。
「やれやれ、やっと終わったか……」
シノンが手をあげたのを確認した俺は動かなくなったレーミを担ぎ上げたのだった。
――――
「先生、戻ってきましたよ」
「ごくろーさん」
保健室ではブラックコーヒーを飲んでいる先生の姿を確認することが出来た。
「怪我とかさせてないだろうな？」
「ええ、翼は撃ちぬいて動けなくはしましたが、体のどこにも傷は負わせてないんじゃないかと……なんなら、今からボディータッチで確認しましょうか？」
「やめとけ、そうしたら私がお前をしとめなくてはいけないからな……ご客人を保健室のベッドへ」

なんだかその台詞って……エロい気がする。
「縛ります？」
「彼女たちが暴れるならばな……おっと、お前に縛らせると変な縛り方するからな」
レーミに触れようとした俺の手元にメスが飛んでくる。
「……冗談です、彼女たちは無抵抗ですから縛るのは必要ないかと……説得しましたし……」
レーミを俺はベッドに放り投げるようになってしまい、彼女は顔面を枕に埋め込んだような感じになった。
「一人は神経系の麻酔をされて、片方はお前の動作にいちいちびくついてるぞ？」
レーミにぴったりと寄り添っているシノンは目を赤く染めている。いや、元から悪魔って目が赤いから涙目になっているっていったほうがいいかな？
「え～と、こっちがレーミだったか？」
「ええ、そうですよ」
「ふむ、ではレーミ……お前たちは何しに来たんだ？」
先生の質問に彼女は口を動かさない。
「シグマ、こいつに打った麻酔……そんなに強い奴だったのか？」
「いえ、そこまで強くしてません、きっと反抗期なんだと……」
「成る程、これだから魔王の娘は困るな……」
ま、魔王の娘？
俺は真相を聞くためにシノンの脇をつつく。
「ひゃぁぁぁ！？」
「こら、シグマ……ちょっかいを出すな」
「ああ、すみません……ちょっと、シノンいいか？」
「え、あ、は、はい……む、無抵抗ですから暴力はやめて下さいっ！！」
先生の視線がこちらへと向く。

「いや、暴力じゃなくてちょっとした知的探究心が……」
「だから、それも女の子に対しては暴力になるんだぞ？」
「違います！そっち系じゃなくて、レーミが魔王の娘かどうか聞こうとおもっていたんです！どうなんだ、シノン！」
ついつい威圧的になってしまい、またもや彼女はびくついている。
「ほ、本当ですよ」
「じゃ、あんたは？あんたはいったい何なんだ～って奴だ」
俺はシノンのほうを見ると彼女は口をパクパクさせた後にようやく口を開けたのだった。
「わ、私は魔王です」

人間界　ターゲットの始末（前書き）

晶「問題っ！この小説が唯一自慢できることは何でしょう？」ネコ「……そんなの誰でもわかってるんじゃないのか？」晶「ま、まぁ……わかった方は感想とかで教えてください」ネコ「やれやれ、絶対に必要ないとはおもうんだが？」

人間界　ターゲットの始末

七、

「残念だよ、シノン……俺は嘘をつく悪魔とか天使とかが大嫌いなんだよ」

「え？で、でも……悪魔は嘘をついてなんぼですよ？」

「そういう揚げ足とる奴はもっと嫌いだ……ちょっとお仕置きしちゃおうかな～」

俺の肩を先生が掴む。

「まて、いたいけな魔王に手を出すんじゃない」

「え～だって、魔王っていかつい顔で粗雑で乱暴ですよ？」

「それはお前の悪友たちだろうが？ほら、この書類の職業欄に『魔王』って書かれてるぞ？」

「あ、本当だ……でも、ちょっとこの子の性格じゃ考えられませんけど？」

おどおどしている彼女へと視線を向ける。

「顔は可愛いですし、胸も結構ありそうで……優しそうな性格はまさに女神ってところじゃないですか？これ、魔王じゃなくて絶対に女神だと俺はおもいますけど？」

「じゃ、知り合いに電話してみろ」

渡された黒電話の番号をまわし……一番信頼できる相手に電話をかける。

『あ、シグマか？』

「あ～もしもし？えっと、零時か？今、忙しいか？」

『まぁ、デスクに貼り付け状態だ……周りの連中がうるさいからな』

「いいじゃねぇか、ハーレムで……で、ちょっと聞きたいんだが……お前、シノンって言う魔王知っているか？」

俺の言葉に『シノン……シノン……』と呟いている。

『ああ、最近格上げになった魔王だろう？よくどっかの魔王の娘とつるんでる女の子だったかな？それがどうした？』
「そうか、それならいいんだ……じゃ、デスクワークがんばれよ」
受話器から
「あ～また女性と話してるわね！おしおきよ！」という恐い声が聞こえてきた。まぁ、あれだ……魔王よりも周りのほうが強いという話はまれに聞く。
「こほん、どうやらシノンは魔王だな」
「やっと認めてもらいましたか？」
よかったぁといわんばかりの視線を俺に送ってくるのだが……
…それはさておき、
「何で魔王シノンは人間界になんか来たんだ？魔界には色々とおもちゃに出来る連中が揃ってるだろうに？」
一般悪魔は魔王のおもちゃと言っていいぐらいに面白おかしく扱われている。俺も悪魔になりたいな～と思ったこともないではないが、それじゃ俺が他人から逸脱しているということが魔界では普通となってしまうので面白くない。
「え～と、魔王の受け継ぎ儀式が終わってすぐに先輩と一緒に倉庫を片付けていたら装置が出てきて、それが人間界に行く道具で～……それなら盗賊団がやりたいって私がやりたいって言ったらレーミさんが盗賊団を結成してくれたんです」
「人数は？」
「私と先輩だけですよ？」
高飛車なリーダー、それより地位は確実に上なのだが引っ込み思案で間違いなく役に立たない下っ端……俺が倒されても一週間後には警察に連行されている姿を容易に想像できたのは俺の想像力がたくましいからではないだろうな。
「あのなぁ、魔王だったらそういうことしたら駄目だろ？」
「え～と、何でですか？勇者が私を倒しに来るのを待つなんて面倒

なんですよ？シグマさんって天使ですけど勇者なんですよね？それなら私、人間界に来た甲斐がありましたよ♪」
何？この子……意外と行動派か？そして、恐ろしいぐらいの天然だな……
「はぁ、そんなことはどうでもいい……」
「ど、どうでもいいんですかぁ～」
泣きそうになる。
「あ～ごめんごめん、とりあえず俺のことをもう怖がってないのならよしとしよう……先生、この二人どうしますか？」
一人は尻を上に向けている状態でふてくされているし、もう一人は勝手にゲームの話を俺にし始めているし……
「面倒だな」
「面倒ですよね……あ～シノン、お前は魔界に帰る気はないのか？」
「え～と、いずれ帰りたいと思っています。でも、人間界のほうが楽しいですね？」
俺はこの子が可哀想になってきた。もう、いろんな意味で……
先生もそうおもったのか、シノンへと今度は視線を向けた。
「こほん……シノン……だったかな？魔王が人間界で悪さをしたらどうなるかわかってるか？」
「え？さぁ？反省文ですか？」
かわいらしく首を傾けるシノンに俺は頭を押さえる。
「ちょっと、そこのあなた……この屈辱的なポーズを早くやめさせなさいよ」
「……ここに来てあんたが口を開いたのかよ……わかった、全世界の男子を手玉にするような扇情的なポーズがいいのか？」
これ以上シノン側にいたら確実に脳みそが張る状態になってしまうと確信した俺はレーミ側にまわることにしたのだった。
「そ、そんなポーズはとらせなくていいわ……それより、私の翼をどうしてくれるのよ！片翼しかないわ！」

「そりゃ、あんたが投降しないからだろ？」
「そ、そうだけど……」
まったく、なんで権力者ってのは大体こんな高飛車が多いんだろうか？いや、例外がそこに一人いるのだが……
「あ～残念ながら二度と魔王の部屋から出られなくなる」
「う、嘘！？」
「悪魔と違って天使は基本的に嘘はつかないからな……」
「いやですよ！そんなの！」
「……まぁ、だから魔王は絶対に人間界にいこうとしないからな……」
涙と鼻水で整った顔を汚くしているシノンがそろそろ可哀想になってきたのだが……まぁ、俺が悪いわけではない。
「あんた、このこと知っててシノンを唆したのか？」
「唆すのは悪魔の仕事だわ……こっちに彼女を連れてきてずっとつかまらないようにすれば彼女はとりあえず、あくどい悪魔には騙されないからね……恥ずかしいから早くまともな寝かせ方にしなさいよ」
レーミなりの優しさなのだろう……
「先生、で、この二人を魔界に帰すんですか？」
「お前が捕まえてきたんだからお前が好きにするといいさ……いっとくけど、帰すときの手続きはお前がしろよ？」
私は知らんとばかりに先生は後ろを向いてしまった。
「それなら放っておいて構いませんか？」
「また、悪さするだろう？あ～あ、捕獲じゃなくて迎撃って命令して置けばよかった」
「どうせする気はなかったんでしょ？」
魔王を倒しちゃうとちょっとまずいことになる。魔王が統一している地域の悪魔たちはやりたい放題を開始……手のつけられない状況となり、魔王を倒したものがとりあえず魔王とならなくてはいけないので俺がシノンをしとめてしまっていたら魔王になってしま

うところだったのだ。
「……しょうがない」
俺は黒電話で給料を申請していた相手を待つ。
「……えっと、魔王シノンとその知り合いの……レーミだったか？その二人が何者かに襲われて生まれ変わっちまった……ああ、シノンが統一していた地域の魔王を決めておくようにと他の魔王に通達しておいてくれ、給料？別の誰かが横から掻っ攫っちまったからあきらめる……珍しい？いつもは意地汚く盗んでいくくせにって……まぁ、手を下すのがおそかった俺が悪いから自重してるの！じゃあな！」
俺は電話を切って後ろの二人組みに口を開く。
「え～……魔王の娘のレーミと魔王シノンは本日付、黒い羽根を生やした謎の人物にやられて生まれ変わった……そういうことにしておいてくれ」
――――
結局、今回の仕事で手にはいった給料はタダ……俺のお財布も増えることなく、剣が突き刺さった壁を修理したせいで逆に減ってしまったのだった。

天界　がんばれ、俺（前書き）

晶「さて、今回で終了となりました」ネコ「はやっ！」晶「ちなみに、この前の問題の答えは更新スピードの速さでした……回答者ゼロ人！」ネコ「……あれ？この小説って二日で終わってないか？」晶「さて、作者が次に書く作品はどういったものなのでしょうか、それに期待しましょう！メッセージなんか受け付けてます！」ネコ「個人的に励ましのメッセージが一通着たら再始動したいとおもいます」晶「来なかったら？」ネコ「……さぁ？」

天界　がんばれ、俺

八、

「じゃ、先生……俺、そろそろ天界に戻りますね？」

「ああ、後のことは私に任せておけ」

公園の公衆トイレで俺は保健の先生に手を振る。

「あの二人のこと、よろしくお願いしますね？」

「任せておけ、彼女たちの戸籍はきちんと確保しているからな……じゃ、神様によろしくな」

――――

「ただいま戻りました」

俺は執事の服に着替えてジャスさんに敬礼する。

「うむ……で、怪我とかないか？」

メイド服姿のジャスさんは心配そうに俺の体を見てくる。

「ええ、これでも体は鍛えているほうですから……」

「それで、そっちで何かありましたか？神様が変わったとか？あの神様、どこに行きました？」

俺がそういうと相手はとても面白そうな顔をしていた。

「ほら、お前の後ろに今いるぞ」

「うわ、ほんとだ！？」

そこにいたのは俺のご主人様だった。

「ただいま戻りました、ご主人様♪いやぁ、一日千秋の思いでした」

羽が伸ばせていい機会でした。ついでに、天日干しもしてきましたから。

「……ふんっ」

ご主人様は俺の脇を素通りしていく。

おお、こわい……

「じゃ、今日からお前の仕事を教えていくからな？」

「ええ、よろしくお願いしますね」

これから始まるであろう俺の下っ端主従関係……誰一人としてこの間に滑り込むことが出来るような奴はいまい。
「……ああ、先に言っておくけどお手柔らかにお願いしますね」
「何を言っているんだ、お前の場合は私だって本気を出すからな」
「……正直、勘弁願いたいです」
「がんばれ、お前ならできる」
俺はため息をつきながらも相手に付き従うことしかできないということを悟ったのだった。
「がんばれ、俺！」
俺のことを応援してくれるのは俺一人！　　～ＥＮＤ～

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9977d/

御注文は？　～天使で！～

2010年10月8日12時49分発行